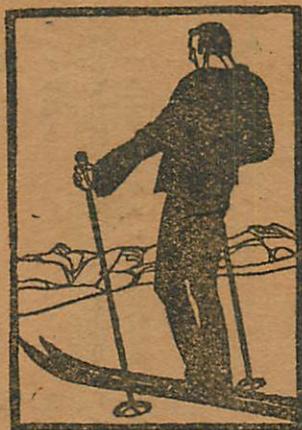


山とスキー

第五十五號



札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十四年十一月三十日印刷開始

大正十四年十二月一日發行（每月一回）
（一日發行）



◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號五十五第

.....

記事

ヒユツテの夜 (巻頭)

渡 渉

田 口 鎮 雄

〔二〕

湖 の 旅

館 脇 操

〔一〇〕

シーシユナルングの超人

廣 田 生

〔一九〕

山岳登行に際して自然の人体に及ぼす偉力(一)

一九二四年エヴェレスト登行の記事を讀んで

本 田 治 吉

〔二一〕

彙報抄録

アマンチュール

〔三二〕

The Revolt Against the Long-Distance Race By Arnold Lunin

寫眞版

奥手稻附近

小 野 修

チユーリン・タムス

大正十四年十二月發行

廣田戸七郎著

スキージヤムピング

四六判 一七五頁
定價 金 壹圓

スキー競技に於て最も重要なジヤムプの一切を解説せるものである。

北海道帝國大學スキー部編纂

スキー術階梯

改訂 第三版
四六判 二二〇頁
定價 金 六拾錢
殘部 僅 少

札幌 山 一 會 的 發 行

豫約募集

慶應義塾体育會山岳部刊行

登高行

第六年

今年も亦例年の如く當部年報「登高行」第六年を十一月に發行する事に成りました。貧しい記録ですが諸君等しく山への足を歩まるゝ方々の御一讀下さる事を望みます。内容体裁等今迄に決定してゐるものは左の通りです。

荒船と神津牧場附近

朝日岳より大鳥沼へ

山岳美小論

北海道中央高地より十勝川を下る

十勝川を溯りて十勝岳へ

飯豊山より朝日岳を経て月山へ

八甲田山より八幡平を経て岩手山へ

早池峰と崎燈臺

三月の穂高岳

大島亮吉
田中三晴

ヘンリー・ヘーク(青水郁太郎譯)

八木橋豊吉

大賀道丙・本郷常幸

國分貫一

濱口久常

齋藤長壽

渡邊三郎

春の槍ヶ岳と西穂高岳
 春の 劔岳
 アルバート登山に就いて
 感想

雲崩の智識に對する一寄與

ブツシュの日記

アルプスの山名に就いて

或る小屋の日記

内藏助平より東澤へ

冬の吾妻山

「密林」消息「年報」其他カット・圖版・約廿葉

裁 四六版アンカット、全部ポイント活字組、約三百頁、精巧寫真版約十五葉

格 豫定實價 金 貳 圓 送料拾貳錢

刊行期日 十一月下旬

申込期日 豫約御希望の方は右實價送料を添へ来る十一月初旬までに當部宛振替口をお利用になつてお申込下さい。

大正十四年十月

東京市芝區三田三丁目

慶應義塾体育會山岳部

大島 亮吉	八	瀧	岡
西川 不二雄	ッ	早	内
大島 亮吉	感	山	田
中村邦之助	想	田	田
波木井六男	岳	幸	三
青木 孝一	岩小屋の日記	夫	夫
漆山 巳年夫	秩父の或る日	部	部
	大和アルプスに就いて	種	種
	一月の飯豊山附近	長	長
		弘	弘
		吉	吉
		衛	衛
		隆	隆
		一	一
		二	二

青 山 温 泉

近くニセコアンヌプリ、チセ
 ヌプリの秀峰をひかへ緩急思
 ひのまゝのスロープは積雪豊
 富、雪質絶佳に又完全なるス
 キー設備を以て、スキーロイ
 フェルの活躍を待つて居りま
 す。

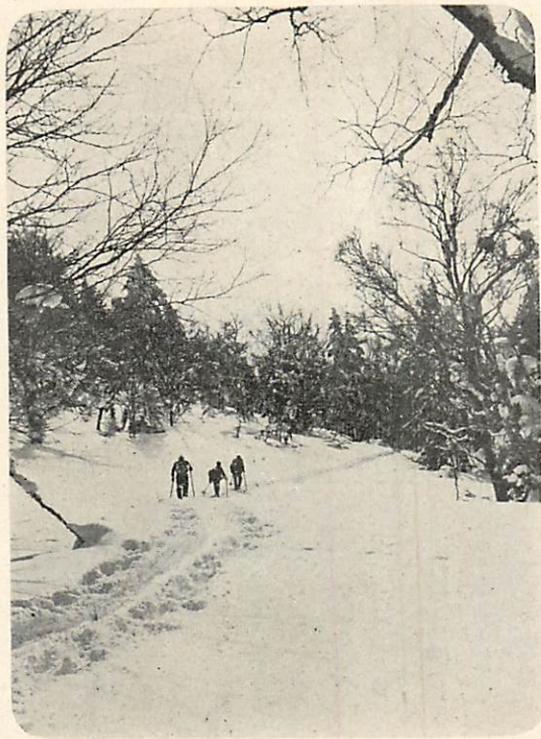
□ □ □ □ □ □ □ □

函館本線昆布驛より一里半

札幌より一五時間

函館より一七時間

札幌青森村育會山岳部
 東京市芝罘三丁目三丁目



奥手稻附近

小野修

ヒユツテの夜

吾々が外の寂寥からやつて来た時

そして眩ゆ相に、戸口を押した時

吾々は、最早吾々自身の名と別々な

お互は友達と呼ばれる——雪焼した黒い人々だった。

吾々は堅い腰掛に腰を下ろした。

雪はなめし皮の様に吾々の着物を白くしそしてひげも——

宛も庭園の雪に吹かれた木の枝の様に——

私達は贈物である小屋の戸を打ち開く。

おゝ吾々は一杯の葡萄酒に漸く心悦ばしくなつたではないか

一日中閉ざされた言葉言葉も

それからお互の手も遂には擴げられ

歌は思ひ起された。

吾々は遠く小屋に來たのだ。

一つの星が

夜をさまよふ者を今や雪の衣から自由にして呉れて——

— Hans Roelli —

徒 涉

田 口 鎮 雄

凸凹は地表の兩相である。突兀たる山頂、その一面には必ず深刻たる溪谷の出現は免れざるものである。我々が今、ある登山のコースを選択するに當り、それは必ず尾根よりするか、又は澤よりするか、或はそれ等のコンビネーションに依るかに分たれる。然らば登山の研究は溪谷に多分にその勞を分たねばならぬ。殊に北海道に於て然りである。北海道は尾根と稱するものゝ殆ど全部は一間餘の熊笹か、灌木の密生で、大部分の登山は澤よりコースをとつてゐる。先づ澤に行くに當り足跡稀なる地に於ては徒涉は必然のテクニクである。私はこの必要な徒涉の研究に就いて私の狹識を以つてあまりこの種の文献に接してゐないので、こゝに貧弱なものでも書いて諸兄の教導を促すものである。

澤の有するコンビネーションに就いて

徒涉に際して水流それ自身の有するコンディションでも可成り數へられる。水深、水流の速度、水温、水の清澄度等がその主なるものであらう。水深、流速は私達が大いに考ふべき點であつて、或は絶対に徒涉を許さぬ場合もあるし又水の存在さへもネグレクトしてゐる場合もある。普通の流速として各自の膺以上の水深は體の自由を失ふ程の抵抗を受けるものであるから、先づ避けてそれ以上の平易な場所を他に求む可き事と思ふ。水深は勿論川の上流と下流とによつて異なるも

のであるが、同一の場所をしても、降雨、融雪、旱魃等によつて大なる差を生ずる。降雨後數時間にして數尺の増水は屢々經驗する所であるし、融雪期の午後の増水は時によつて私達のコースの變更さへ餘儀なくすることさへある。殊に融雪期の増水は一吋我々が考ふる以上夕方近くに於て甚だしい。降雨後や融雪期の午後などは往路に於て容易に徒渉出來た箇所が、歸路に於て非常な困難をみることは頭に入れて置かねばならぬ。水速は河床の傾斜度にもよるが、我々が問題とするのは水量による水速の増加である。又傾斜度の大なる場所に於て水深の大なる時も同様に問題である。水速大なる時は僅か膝位の深さにて堪え得られない位の抵抗を感じる時もある。又水流が體に當る事によつて水深以上の面積の抵抗を受ける。こゝに水温も相當考へねばならない。殊に早春や晩秋の朝夕は痛い位感じるもので、その爲に狼狽して失策をやるよりも少し困難でも岸をへづる方がより以上能率のあがる事がある。殊に北海道では三日も四日も毎日七八十回も徒渉しなければならぬ場所もよくあるから、融雪の冷たい水温のことも看過出來ない事の一つである。河水の清濁は私達が徒渉に際して足場を見究はめる上に大いに關係する。雨期や融雪期の濁流の徒渉に際しては特に足場を杖などにて確かめて後渉るべきである。

次に考ふべきことは河床のコンデイションである。地質としては粘土、砂土、礫、岩、又はそれ等の混合せる場合等種々ある。これ等の表面に厚く腐蝕質や水生植物のある場合や、又は全く之を缺く場合もある。場合によつては之に依つて足を滑らしたり、又は一尺もぬかる事も多い。水面の波立たぬ場合は粘土、砂土、礫等の時で河床の平坦な箇所か岩石にして深い場合である事は言を俟たぬ。尙同じ岩石でも一枚岩に續く場合や岩塊として存在する場合とあるが、後者に於ては水深一尺内外にして相當水速ある時は大小種々の波を起し、かゝる瀬の徒渉は人によつて非常な巧拙がある。殊にその岩石の不安定に動搖するものにあつて然りである。

河岸のコンデイションに就いても考ふるに價値あるものである。河岸が水面數尺又はそれ以上高く且つ、水深も相當ある箇所を下りる場合は河岸の崩壞は注意を要する。殊に澤の彎曲外部に當たる側の河岸に於て増水後等に屢々みる事である。又冬期河の雪上を行く場合も同様である。

服装及び用具に就いて

服装は輕快なるべきは云ふ迄もないが特に注意すべきは腰から下である。ズボンには水にて硬化するが如き布地は股擦れを生じ易い。脚部は可及的水流に對して抵抗を少なくするを要する。私は木綿の日本在來の脚絆を推賞し度い。卷ゲートルは解け易く、ストッキングは水に浸かると甚だ脚部の重量を増し不自由である。草鞋は普通の藁製のもの最良と思はれる。丈夫だと云つてマニラ麻や木綿ボロ製の草鞋を用ふる人もあるが、水に濡れ通しの徒涉に際しては藁の草鞋に比して非常に摩擦が少ない。平地用なればいいが徒涉には避く可きものと思はれる。又徒涉用の草鞋は水を吸収して一舉足毎に大なる抵抗を受けるからその緒やチ、は殊に丈夫なのを採用し度く思ふ。私の推賞し度いのは之等の點が丈夫で且つ底面積が大きく従つて他物との摩擦の大なる佐渡草鞋である。徒涉は一般に草鞋の損傷の大なる故に特に餘分の準備を必要とする。草鞋を履くとしたら足袋は用ひねばならない。素草鞋は唯さへ足を傷め易く殊に徒涉は指先を傷め易いから絶対に避け度い。足袋は厚底で指先や草鞋の紐の當たる部分の刺子になつた普通のものがいい。ゴム底や裏皮の足袋を草鞋履き兼用にと主張する人もあるが、徒涉に際してはゴムや皮は頗る滑り易いから、あまり好ましいものと思はれない。

靴を用ふるとすれば鋏打のものを履き度い。元來、革は長時間水に浸すと何れも多少は水分を吸収して生皮の状態の如くなるから岩に附着してゐるミルデューに對し滑り易くなる。鋏はやはり研究されたトリコニー鋏か、クリンケル鋏が最良である。特にトリコニー鋏は岩面に對し最大の摩擦を持つ様に考案されたものであるから、徒涉用としても之に超ゆるものは他に無いと信ずる。靴下は夏でも一枚は厚いウールの奴を用ひないと肉刺を生ずる。何れにしても履物は出来る限り底面の摩擦の大なるものを選択すべきである。再言すれば日本脚絆にトリコニーブーツなら身支度に於ては充分であらう。

尙徒涉するに當り用意して置く可き物はロープに杖である。ロープは友と自分とを連絡確保して徒涉を安全ならしむる

物で、普通岩登りに用ふると同様の直径一種位のマニラ麻の撚繩で少くとも二十米はあつて欲しい。水に繩を濡らす事は質を弱めるから禁物である。杖は強いて使用しない人も可成りあるが私はその必要を力唱する者である。兩足以外に体重の支點を得るに云ふ利益も合理的に認め得るであらうし、一步踏み出す前に足場の探りを入れる事は杖によらなければならぬ。杖は握り易く長さは二米位はないに不充分である。徒渉する場合には私は何れにしてもロープと杖は持参しやうと思ふ。

徒渉のテクニク及びその他の注意

今徒渉が危険と云はるゝ場合を考ふるに徒渉中のテクニクの失策、例へば足を滑らして身体を濡らしたり、足を負傷したりする事もあらう。然しそれよりも体の安定を失つて後、二次的に起こる危険、即ちその徒渉箇所附近の下流のコンディション例へば下流數間にして水深の増大する場合とか、瀧などの存在することによつてその危険は倍加される。従つて徒渉の必要とせられし時に際してその下流の種々のコンディションはその徒渉箇所同様に考慮してから決定すべきである。下流に於て次第に水深、水速を増す場合は格別の注意を要する。

愈々實際に徒渉するに當つて体の安定を保持せんとしての第一のファクターは体重の支點即ち兩足の裏面の他物に對しての摩擦である。安定度は可及的合理的な履物を用ふる事は勿論であるが、体の重力線の支點に於ける角度、支點の面積及び杖等による支點の増加等により極大値をとるものである。それと同時に体に作用する外力即ち水流と体との關係もネグレクト出来ない。

足場は意識的に川底にフラットに置き、体重はその全面に掛かる様に注意する。止むを得ざる限り足の母指の一本や靴底の數本に全体重を掛けてはならない。特に動搖し易い岩面に對しては、先づ杖又は足で假りに力を掛けて安置された後か、又は安置した位置を豫想して後、初めて眞の体重を掛く可きである。今川底に岩石の存在する時はその岩石の基部と上部とは水速を異にする。脚を多く濡らし度くないと云ふ人情から多くの場合岩の上部に足を置きたがるものであるが

そこが比較的不安定の足場と見做したる時は、是非その岩に接した上流の川底に足を置き度い。下流の川底は岩に接した上流のそれに比して一般に深いからである。勿論それ等の川底が餘りに深い時は岩の上部を踏むより道がない。然し岩が水面近くに來てゐて水が深ければ益々岩の上面を洗ふ水速は大である。

杖の使用法は今こゝに右岸より左岸に涉らんとする時は右手は掌を上にして杖の一端を握り左手で杖の中程の所を掌を下にして握り杖の石突の方を上流に置き川底を壓へる様にして持つべきである。決して杖を一方の手に持ち突き立てる様にしてはならない。丁度スキーの杖を用ひての半制動の要領である。かくすると一步足を下流に拂ひ流されても杖を抑へさへすれば体の安定は殆ど再び保持出来るであらう。杖を突き立てる様に持つてゐると若し杖が滑つて川底の支點をはずれた時はそのシヨックは猛烈に大きい。杖を抑へる様にさへ持つてゐれば案外小さいシヨックで済む。

次に体を受ける水流の抵抗であるが、之は水深即ち体の水流に當る部分の面積と、水速の相乗積である様に思はれる。この水流の負荷面積は可及的小ならしむる。之を換言すれば体を水流の方向に直角に即ち体を河岸に向けて水に浸つてゐるのが最も抵抗が少なく安定なるべき筈の處、實際私達が腰迄浸つて水流を支へるに當つて約二三十度の角度に上流の方に体を向けるのが最も安定に支へ得る事を経験してゐる。之は甚だ不可解に思はるゝが、想ふに之は体の面積に受くる抵抗と云ふものよりも足の踏張を最大ならしむる一種のポーズであると解釋してゐる。然し水の抵抗は或限度即ち乳迄も水が來るに非常なそれが緩流であつたとしても抵抗の他に浮力も加はつて、如何なポーズをとらうが殆ど全く支へ得ない程恐ろしいものである。

然し我々が普通徒渉するに當つて決して水流を不利用に終つてはならぬ。今腰程も水があつてかなりの抵抗を感ずるとした時、その流れに乗つて幾分流れされ氣味に涉つて無意味に踏張りをやらぬ方がいゝと思ふ。然し此處に御互に注意すべきことは流れに乗ると云つても初めから下流に向つて斜めに涉り始めてはならぬ。流れに直角若しくは水速に應じて幾分上流に向つて斜めに涉り始めてこそ結果に於て下流に斜めに涉ることになるのである。換言すれば川幅の最早安全と云ふ可き所迄は踏張つて後半を涉る時は流れに乗つて成るべく樂に涉ると云ふ意味である。私の或知人の融雪期の午後の徒渉

に於ける不慮の死はかゝる事も原因してゐたであらうと思ふ。兩岸が浅く川の中央が深いノルマルな流れとしたら川の中央が最も水速が大で従つて大なる抵抗を感じる。

又水中で足が歩行の形をとる時にあまりに足を高く舉げるのは禁物である。支點が一本の足のみで重心が上にあがり上部の抵抗面を増加するもので不安定極まりない。先づ足を少しく浮かせて最初少しく上流の方向に進めて後、足を流れに乗せて斜めに次の足場にすらす様に運ぶ。直接足を次の足場に運ぶと流されて思ふ足場より幾分下流の足場を踏んで滑る事は屢々経験する事實である。

更に進んで少しく徒渉が困難と豫想さるゝ箇所に至つた時は成るべく後に引返し、より安全な箇所まで對岸に涉つて置くべきであるが、万止むを得ざる場合は必ずロープを使用し度い。先づ仲間の中最も經驗に富む者の胸に適當にロープの一端を結び、他端は直接にショックの來ない様に木とか岩角に巻いて確保する。此際ロープと他物の接觸面には帽子又は手袋の如きものを挟んでロープの摩り合はせを緩和し、又ロープは常に先頭と最短距離より一步か二歩巾丈長く保つ様に順次延ばしてやる。これは加速度のついたショックを避けるのミロープを成るべく水に濡らし度くないが爲の憂懼からである。先頭が對岸に達した時は先頭は對岸にて同様な確保をして兩岸確保の下に一人づゝそのロープに胸を結んで引き寄せられる。此際尙多少危険とするならば、先頭はリュックサックを残して涉り後仲間の一人が兩岸確保の下に往復半してそれを運んでやる。然しロープを持参してゐない場合には他の者が先頭の杖の一端を握つてやるか、長い棒を目刺しの様に皆で抱き乍ら共に安定を助け合ひつゝ渡るのも一法であらう。降雨後や融雪期の濁流を涉る時などは特に杖の探りとロープの使用とは利用すべき事と思ふ。又暗夜の徒渉は濁流以上に危険であるから絶対に慎み度い。尙水が深くして川巾が比較的狭い所に於ては流木を渡して丸木橋とするのも一法である。川が潭となつて水速もあまり大ならず、下流も安全で對岸も容易い匍ひ上れ相な地形ならば流木で筏を組むのもよからう。然しこの筏には私はまだ經驗を持たない。だが山奥の材木の流送人夫の如く竿一本持つてクル／＼廻轉する一本の材木に乗り乍ら下る様な藝當はとても出来ない。

冬期の徒渉は最も危険である。殊に氷雪岸を鎖した時に於てはとてもジャブ／＼涉れたものではない。足を水に浸ける

ことは絶対に避け度い。それはアクシデントの導火線である。スキー使用の場合なれば兩岸が雪に蓋はれてゐる川幅として最も距離の迫つてゐる箇所それが一米内外なればスキーの長さ即ち、底面積の大なる事を利用して涉れる。私は仲間のおもむき時一米位川幅のある所で往路は何なく渡れた所が、歸路午後の陽氣で川岸が崩れて二米以上にもなつてゐたので皆で長い木の枝を僅か十本程集めて之を對岸に渡し、スキーを履いた儘その底面積の大なるを利用してスキーを流れて平行にして横に一步づゝ進めて相當の水量の難所を案外容易に渡り得た事がある。然し積雪の時の河岸は薄氷の上に新雪を厚く装つてゐる事があるから注意を要する。冬期若し誤つて水中に落ちた場合は匍ひ上つたなら面倒でも直ちに靴を脱いで靴の内部を調べ、若し少しでも水が浸入してゐたならば靴の内部を乾燥せる布又は紙で拭き取り、必ず乾いた靴下と取換ふるを要する。凍傷の原因となるからである。尙スキーが水に濡れたらその時少しの時間をかけても乾いた布の摩擦で完全に乾燥させた方が結局に於て時間の經濟である事を知つた。

想ふに徒渉は一方の河岸を行く時に行きつまつて後、止むなく行ふ手段であつて誰も好んで行ふ可きものでない。我々が今川に沿ふて目的地に進む折に常に注意を拂はねばならないものはその兩岸である。そこには川に沿ふて魚釣りや獵師の往來する小路の走るのを屢々發見する。その路の發祥が人家を離れて餘りに山奥であるのに驚くのである。かゝる小路が川岸に消えてゐる時は必ずそこが万人の立證する安全な徒渉地であつて、然もその對岸からは必ず再び路が走つてゐるであらう。

それから澤がかなり大きくなつて來ると兩岸が開られて中の島を形成する様になる。そして一方が涸澤になつてゐる箇所が應々にしてある。かゝる涸澤の成因は雨期又は融雪期に川が一時に水量を増した時に本來の水路ではその水量を一時に押流す事が出來ず、他に低地の最短距離を求めて奔流せるに因るものである。故に私達が澤を下つて來る時川條の屈折せる所に來たならば、一應その屈折せる内側の川岸に注意して行くに涸澤を發見する事が多い。かゝる時は平氣でその涸澤を下つてこみるべきである。然る時は案外自分が近路をしてゐる事を知るであらう。わざ／＼水の多い本流を脛迄浸して傳ふには及ばない。然し之は澤を下つて來る時にのみ云ふのであつて、澤を上つて行く時に涸澤を發見しても、それが本

流に合する澤か、又は他の峯から出てゐるかを見究める注意は勿論拂はねばならぬ。

最後に一言し度いのは徒渉中誤つて轉倒した時である。その時に先づ取るべき手段はルユックサツクの一方の肩又は必要に應じて兩肩をもはづし、決して仰向の位置に体を置いてゐてはならない。直ちに俯向になり且つ、上流に頭部を向ける事である。さすれば僅かの足掛りでも立ち直すことが出来る。然し水量が豊富にして、とてもかゝる動作の思ひもよらぬ時なれば直ちに諦めてルユックサツクをはづしたら、すぐ流れに乗つて最寄の岸に泳ぎ始めるより外仕方あるまい。山に來て水泳が必要だとは思はなかつたと嘆息した水泳の不得意な友人の言も無理ならぬ事と思ひ當る。

ラン氏の寄稿に就て。

別項所掲のアーノルド・ラン氏の原稿は氏が本年度英國スキー年報に發表するところのものであるが同時に日本スキー・ランナに對しても發表の希望を以て特に寄稿せられたものである。

氏は以前からダウエル・ラウフ偏重に對して強確な反對意見を持つてゐるが、本稿も亦之が力説に努めてゐる。即ちダウエル・ラウフ（長距離競走）はパウエル・ラウフ（百姓競走）であるとまで極言してゐる。たゞこゝに注意すべきことは、氏が英國のスキー家であり、北歐諸國の如き故郷に於て長き冬季間を充分に雪に親むるの機會に乏しき立場にあると云ふことである。勿論氏は殆んど毎年全シーズンをスイスに送つてゐるが――。

氏の所説は濕雪地方乃至無雪地のスキーランナーには参考となるところであらふ。（かの生）

湖の旅 (2)

館 脇 操

湖を渡りて國境の峠へ

湖畔—北見釧路國境 二里強

朝もやの湖面にまつはりフツブシの姿例の如し。今日も晴光の囁きを聞きながら縁側に出て雄阿寒の日記を書く。

八時湖面を舟にてシリコマベツに向ふ。湖は舟の波紋のみを大きくして行く。まさの初秋の湖心に雄阿寒の影が一入大きい。雌阿寒もその全容をあらはして湖の中に雄阿寒と朝の微笑をかはす。ボンモシリが水鳥の様。

大岬のまはりで、岸に舟をよせる。葦の群落にフォーカスをあはしてゐたら、カニが『フツブシも入つてゐるかい』といふ。ジーとシャッターをきる間にも、湖は、森閑とし

てゐた。舟を湖岸に近くすゝめる。鴨が七羽バット立つ。チエルイモシリを右にする頃『あの邊から熊が湖をよぎつてねー』ミシリマベツの主、關さんがつぶやく。

阿寒のマリモ。ふくとかな湖の底の軟かき胸懐。ふるればくしきまろやかな緑のさゝやき。いつももしれずこの水底に秘められたマリモ。コタンの美しきメノコにも抱かれた日があらう。ギヤマンを通して秋の夜の灯にみるほのかなるかのときめき。クラシツクな傳説味をおびたそのみめ。私達は水面を通して物語りの園に遊ぶ。

シリコマベツの附近に舟をつけて、二人は國境に歩むだ。やけた針葉樹林を通つて、デクザクを切りつふりかへる頃雄阿寒を望む心はこの上なき旅の收穫に熟れた。文句なし

の連続である。クマゲラが枯木にとまつて午後の陽をじつとあび何やら考へこむでゐる。國境近くの森林はかなりに端正だ。標杭の所で子供らしく二人はチヨコレートスターをしやぶり、北見側に三步許り入つて来た。シリコマベツまで下つて晝をつかつた家にはクリンサウが實を結むでゐた。

歸りは湖畔を歩く。馬鹿に好い道だ。それでも暑くなく人にも遇はず、チンカラカンと空は晴れてゐる。すべてが許される丈許されてゐるコンデイションだ。利尻の島廻りに利尻山を仰ぐ島旅の思出で、樹林越の雄阿寒が呼ぶ。時々カケスが簾からガザ／＼とムビだした。雌阿寒への道をチヨロツと見て、灯もしの頃山浦着。

夜、雌阿寒でとれた熊祭りに見にアイヌの小屋に行く。音吉オドウのムリとの如き言葉に始つて、後は踊りと氣合、奇聲が出駄羅目に結びついたすてきな元氣の祭だ。カモイの前に熊の首を飾つて四人のメノコと三人のアイヌは二人の子供を交へて狂熱した。原始の祭壇よ。原始の祭人よ。無技巧の技巧よ、むきだしの徹底よ。魂の野性の呼び聲よ。カムイの前への粗暴なる原人の敬虔よ。在りし日、このまつりのうち、メノコと熊とりし若者に、闖入者なき榮光の

幸は恵れてゐたのだらふ。そして夜をたけなはに、支配なき世界に立ち唯カムイの支配の前に、大地をふみしめて炎の調のもと、野人の榮冠を輝しく讃えたのだらふ。饗宴に照る獸人の雄々しき血を、カムイも其のつたはり來し祖先に捧げ、若き稚き者に、その來る日を希ひ祝ふ。おゝ、狂へ、熱せ、まだ天と地はお前のものだ。お前のカムイは誰のカムイでもない。お前のカムイはお前のカムイだ。祭は續く。奇しき祭壇は暗き灯に浮く。私達も異様の昂奮を感じ來つた。(一一九)

湖畔にて

終日驛 遼山浦

終日小雨に煙る、隣にゐた洋畫家の佐藤さんは、驛馬に跨つてルベシベに去る。肩に背負はれた荷の中にはあのくろみをおびた、おちついた阿寒の畫が入つてゐるのだらふ。

『前の湖にゴミを捨てるのは嫌ですな、さつきもきびの皮が遠くまで流れて行きましたよ』と藝術家らしい落ち着きと香をもたせて言はれたのが耳に残る。そう言へば昨日は Take District の話をお聞きし、そのあとが、もつと聞きたかつたのだ。

銀鼠の日は一日つゞいた。午前中阿部さんの家に行く。午後標本整理、三時頃、ぬれた汀から、クルミの實をもらひにアイヌ小屋へ行つたが主人は留守だつた。五六匹の犬にむやみに吠えられる。歸るまでに着物がじめじめした。湯のたぎりの音を聞きながら、保さんにお誕生日のお祝を書いた。灯ともしの前、馬鹿につれづれになる。カニと地圖を借りて、磁石に合はせながら、昨日みた山に就いて、色々迷論をたゞかはす。結局見えすぎる日の山はどうしても敷へきれぬ程見えるといふ頭の悪さの曝露におはる。

湖も中々の憂鬱家だ。夜霧に煙つて、いやにだまりこむでしまつてゐる。少しは話しかけてもいゝだらふ。でも湖はじつとしてゐた。心地好いうつとほしさの中に、いつか湖はむつたり眠つてしまつた。ごろりと私達も熊の皮の上に横になり、じつと天井を仰いだ。(二一九)

阿寒湖畔にて

湖畔—ボツケ—附近丘陵 一里

朝からガスが深い。半日休息。山浦の主人と話をする。こちの呑氣に大分主人も呆れたらしい。今度又二度も雌阿寒にと云ふ。今日も湖はいやにだまりこむでゐる。ポトリ

—ポトリ—と落ちるしづくの音が一寸くらい氣分にひきこむ。地圖やメモの整理をする。

午近くに、うつすらしてきた。黎明の微光の如く、ほのやかに漂ふてくる大氣。湖面よりシリコマベツのあたりに虹が大きくかゝつた。午飯後汀づたひにボツケに行く。紫がかつた赤い花が野地めいた所に咲いてゐた。森にはナ、カマドが紅玉の實をつゞつてゐた。しのびこむだ午後の空氣が一入に透明だ。岸近くの葦がさやさや鳴つてゐる。ボツケには蛇が多いと言はれてゐる。湯の湧く所は三ヶ所もあつて、湖面より離れた所のが最も大きい。むくつけき地の膚に、火の山の最後のあへぎがほのほひくる中古代神話にまつはる長い奴がだらりと横一文字になつてゐる。湖に面しては女性美を持つたオンネモシリがまなかひに浮ぶ。雄阿寒よりは、金光鈍いうす霧がかゝり、山腹にかけて、瀑口から虹がかゝた。中の湯には据風呂があつた。誰が入るのか知らないが、こきたない手拭が二つ、本の枝にかゝつてゐた。私達はこゝから小逕傳ひに、森を横ぎつて山浦にかへり、茶を一杯飲んで高原に遊びに行つた。道すがら女の人が三人、しきりと山葡萄を摘むでゐた。ガスがひどい。でもこゝらわたりの丘から見た秋の煙る湖にはどこか

に忘れ難い趣きが抱かれてゐた。

新道の方に横ぎつて、歸る道、湖畔より十町邊のハンの繁みにすひ込まれた逕に誘れて、湖畔に出た。鴨がオンネモシリのはじからバツと飛び立つ。鳴き聲がいやに淋しかつた。水草花咲くほとり、雄阿寒の雲の走りぎはに、心はさらはれてしばしの憩をする。岸には、こゝでも初秋の日の夕風に、葦がそよいでゐた。

『居ながらに見らるゝものを殊更に幾度立ちて山をみるらむ』故人はよく心を讀むだ。昨日から今日、何度その境地を味はされたやら。

歸り道、アイヌの茂吉に會ふ。『何處へ行つた』と笑ひながら聞いたから『そこまで遊びに行つたのだよ』と言つたら又笑ひながら、軽く頭をさけて行き去つた。微かな青空がフツブシの肩にあらはれた。でもまだ雲足は重く、旅愁にうたれながらアイヌの後から黙々とシアンヌの部落に向つた。

アイヌは其の昔、シアンヌにたむろし、そこに約十軒の家を營み、ボツケに又十軒の小屋、イベシベツに二軒を營むでゐたと言ふ。夏はアクベツのコタンに下りて畑を耕し、冬はこのコタンに居て湖にヒメマス、アママス、ウグヒを

漁り且山に兎熊を追つて牧人の生活をしてゐた。然るに時はいつか彼等に生活の恐威を與へ殊に湖畔伐木が終つてからば、此の方、僅かに今はシアンヌに四軒を残すにすぎぬ。在りし日、熊祭りは月に幾度かこのコタンに行はれ、彼等は原人の生活を高らかにうたつたと聞く、湖畔の夜話は、雨の長夜にゐるり火の側ながくつゞいた。(二三一九)

雌阿寒岳

湖畔—雌阿寒山頂 約三里

アイヌの音吉が今年になつて既に二頭まつたといふ。見た熊は十頭、その上に夏になつてから湖畔の驪遼山浦の馬は三頭もやられ、山麓でも三頭害をうけたとか、今年には熊のあたり年さ見えて、雌阿寒でも近來稀に見るの盛況だといふ。

朝ガスが深い。でもいやにしとつてゐない。明るい朝のときめき。縁が浮いたと思つたらそれは對岸の山麓であつた行かう。二人はつぶやいた。七時半、庄助さんと三人連で立つ。湖畔から樹林への道に來た頃、天候ははつきりまきまつた。舊道の橋は渡らずに、新登山路は、うぐひ川の右岸近くをからんでゐる。見覚えのある針葉樹林でそれに氣

がついた。約一里許上の樹林は雄阿寒にも増して美しい。硫黄川を越しても尙單一な懐しい嚴かさや懐しい寂しさを秘めた樹林はつゞく。そしてピリカネツブの別れ道近くで、ネムロトブの銀灰の森と變る。ネムロトブ、お前には、より一層な北の韻がおりこまれてゐる。私達は森から傳はる柔かな光線の一つ一つに、軽やかなさゝやきを興へたい氣にひたり乍ら、紫帯んだ森のしめりつちを踏んで行つた空は空色に晴れて、梢越しに湖の如くに靜だ。秋の旅だ。秋の旅のお前の貌だ。自身が自身に言ひかければ何事も云へない心安き微笑が頬に浮ばざるを得ない。朽葉に埋れて名も知れぬ菌がうづくもる。

別れ道迄に三時間ばかりかゝつた。樹林を離れて、急にひらける視野、おゝ、雄阿寒、枯木越に、いくたのふかむくろきの森を侍らして、山は大きくうなづく。白雲がゆつくりこのもとを流れる。秋の山はしづまりかへつてゐる。針を落しても音のしさうなデリケートさを有してゐる。俺の心が顫へたら、それはかそけききどきをうたせて、地の底に行くのだらふ。或は空に波紋を描いて、いづこともなくひろがつてゆくのだらふ。さだめとお前の名づけることの不可思議さよ。山に居て、うごかざる彫像よ。お前の一切

はやつぱりお前のものでない。鈴が氣持よく晴れた山路にひゞく。清水川で食事、岩間もる水をごくり／＼とのむ。ナ、カマドの實はこゝにも赤く熟してゐた。

槍の裾をめぐつて頂上へ急ぐ。全體よりの感じは大雪よりもやはらかくて好い。恰好にまとめおほせてゐる。阿寒富士に久潤の挨拶をする。コマクサ、イハギキョウの減少には一驚した。かつて、『久し振りだね』と言葉をかけたその群はどこに去つてしまつたのだらふ。人間よ。呪ふべき生物よ、山に拂ふべき尊敬すら知らず、なぜ山にやつて來る。破壊者よ、立體に築きあけるそばから平面を破壊してゆく愚を知れ。せまい立體より、奥底の知れない平面にひそむ眞理を探れ。人間達よ、お前達が立體を考へることの如何にうすいことよ。花の濫獲と小屋の不道徳は私を悲しました。

頂上への尾根にとりつく。青沼、赤沼、足寄よりの方に少し下つたが、直ぐに頂上にかへる。ガルバルデーをほうばり、番茶を飲んでゐたら急に霧がきた。眺望は南面、西南皆無、間も無く下山、途中一寸霧にまかれる。ガンカウラの實は熟れてゐる。陽をあびてゐると所々に私達を呼

ぶ。どつしり腰を下して實を食ふ。山の寶玉は廣重の藍の夢をつゞる。道すがらとて石室の手前から、槍ヶ岳に登つてくる。途中に小さな熊の足跡があつた。歸りしな清水川への小徑をもつと下つた所に、新しい八寸許りの足跡がある。やつぱり居るらしい。雄阿寒の見える所で又一服、ゆつくりと煙草をふかす。

歸りの森林は行きにも増して、魅惑であつた。ネムロト、から、エゾト、へ、大きな斜面の處女雪にスラロームをかぐが如き、魂の躍動を覺える。湖岸へ出た時には未だ明るく雄阿寒がクツキリ浮き出てゐた。湖畔ではその日熊に食はれた前富澤主事の話でもちきつてゐたらしい。

カハチツブのさしみ、カハチツブのかまほこ、香の高い湖畔の椎茸、ウ井スキーかたむけつゝ、殊更に、湖に向へば私の好きなオリープの夜は、湖に迫つてゐるのであつた。果て知らぬ旅の夕雲よ、此の華かな夕暮の空の饗宴の一時お前の爲にも一杯かたむけやう。このオリープなす湖の宵は、お前の心も、俺の心も知るだらふ。ウ井スキーはまたかたむけられた。(一四一九)

ピリカネツブへ

湖畔―巡視小屋 二里餘

巡視小屋―ピリカネツブ 二里餘

ピリカネツブ―湖畔 二里半

二百二十日前後には湖畔では牧草を乾しても乾しきれないと言つてゐる如く、天候不定だ。一般に雄阿寒が見えない時は天氣がむづかしい。何となく雲足の重い日だ。熊の通り道と言はれてゐる大坂の谷地、それに七曲りを行く秋日とて、心がいさゝかひきしまる。

六時半出發、雌阿寒の中腹、巡視小屋まで急ぐ。だんだんに陽が針葉樹林にさして、朝の嬉しいおのゝきが眼に見える。森は今命を淨めて、今日の世界に爽かにおくり出された。ウワンダラー、まあ立ちどまつて、此の空氣をウンと呼吸してくれ。どこかでうけいれきれず、あるみたしきれないその心に、愉悅を感じつゝ、力自身にみちみちくる感傷を知るであらふ。

ピリカネツブの斜面に下り出した時にはガスがきだした。たどりさまよひし森の中でも、この道を大坂上までは、最もおくふかきものゝ一つである。よどみ、空氣はアークテックの貌と輝きと重みをみせてよどむ。樹幹のものおもはしき愁よ。こゝにさぐりえて、ほのぐらき洞窟の中に寶

玉を愛づる心よ。一里餘の行程はものぐるはしき迄に、わびしみの底の喜びを秘む。友よ、此のよきしどまの中に、じつと手を握り交はさう。さゆらぎのうちに、觸るゝ魂の魂を知れば、森は森の殿堂に、森の妖精を呼んで、灰色の座に緑の衣きつ、祝福の舞踊をなすであらふ。

鹿のくそまがりと云へるあたりには明治の終りに、よく鹿をみかけたといふ。鹿の鳴く聲に、月夜のアイヌのがどり火が見たい。でも、追へない夢を追ひたがる俺がむりか、追はせる時が無理か。底光りする森の心。

大坂の谷地から見た雄阿寒は、全く好い。肌ざはりの好い初秋の晝に、ゆたつりとする。熊もこゝなら氣に入るだらふ。莎草も枯れて、葦の間にだまつてヒルムシロが浮く。

白水川は出口に近く、逕がながい氣がした。新道にあへば今しも、ピリカネツプの山には、白い霧が悠々と湧いてゐた、驛遞へ。そこで茶を汲みながら又々熊の話の話を耳にする。かへりは舊道七曲り道、ありし日のくらさはこゝに残されてゐる。高原は、秋の高原……それはあなた方が靜かに眼を瞑つて描く繪にも相應はしい。急に小馬が、一頭、五町も先からとむで来る。オネモシリの見える頃には、日が暮れかかる。ハンの林、ナラの林、そして草原、おなじ様な所

を通つて行く。

はろばろに來しこの高原よ。旅の日の終りの夕つ方。カニも歸つたひとりの道に、後よりは又後よりと湧ききたる旅の心もて、一步は一步をなつかしみ、一步は一步をふりかへり、靜かに身にしみわたる歩みを運ぶ。五時に歸着。

しのふる雨の音を聞きながら、二人が荷をくゞり終へたのはその夜一時に近かつた。(二五—九)

湖を下る

湖畔—野澤 七里

野澤—舌辛 六里

左様なら、湖、そして湖の畔をめぐる山よ、古代想像からうけるやうな原始のかほり、あまへたいだけあまへ、酔ひたい丈酔ふた旅人は、うけ入れるべく許されたものを盡くうけて、豊醇な宏大なるうたけの後の心を、謹しき讃えの光に洗はれつ、湖と山に對して居る。嫌人的ではないが、断片的におりなした人から離れた自分の足跡を一つにつゞつてなつかしや初秋のこの旅をしふりむけば如何に恵まれたことの多かつた事よ。左様なら湖、そして湖をめぐる山よ。

アイヌの茂吉は荷をつけて後から山を下るといふ。帽子をとれば、宿の人や阿部さんが、曲り道に私達の姿が失せる迄見送つてくれる。もう一度帽子をとる。その時私達はうすけふる湖にも、瞥見を與へることを忘れなかつた。雄阿寒のつきまとふ限り、ゆるい丘陵の線を越して雄阿寒にはおもしろき白雲が絶え間なく動き、限りなく湧いてゐた。この雲のたゞすまひこそ、遙に二人が、蔭ながら慕ひきたつたものだ。地の弾力に、靜かなる旅を行く悦びは、益々熱れて行く、大澤の曲りを下つた時、茂吉に追ひつかれた。

茂吉は一頭の小馬をつれ、白い彼の犬が、一番あとから、ヒョロ／＼ついて來た。ピリカネツプの小屋にもよらず尙下る。

私達の阿寒の旅は終つた。柏の林、丸木の牧柵、葦の沼野その所々にキビの背高い畑、私達は阿寒の流れに沿ひ開け行く中を、舌辛に急いだ。(二六一—九)

阿寒の道について

つけたりの様ではあるが、参考までに、阿寒の道について記さう。阿寒への道は時代的に三つにわけることが出来る

1. アイヌの踏分

2. 造材小屋時代 (舊道)
3. 山岳會道路開鑿後 (新道)

釧路道の昔 (昔と言つても明治三十七八年迄) の登路は舌辛よりすれば、二十五線から西高臺を通り、阿寒川の右岸をニタベツを経、徹別川を渡り、現時第二の發電所のある附近の飽別コタンに至つたものである。そしてこの時代、驛遞は、このコタン近く、やはり右岸にあつた。(現在は左岸のトロ道に沿へる所にあり) それから尙北上して飽別川を渡り、今の第一發電所の前を経て、阿寒川橋 (五万の地圖には飽別橋とあり) の北部にて現在の道路に會し、この道筋をピリカネツプ迄行き、ピリカネツプにて左岸に渡り、川沿ひにすゝみ、オクルシベを渡り、オクルシベ、阿寒川合流地點の温泉湧出地に至り、右岸に渡り湖畔へ、又一つは左岸を瀧口迄行き、瀧口のもとで阿寒川を渡り、湖畔づたひにボツケに出で、このコタンから更にシアンヌ (湖畔と稱する所) に到つた。又ピリカネツプより一路は、舊道七曲りを、七曲りのデクザクに依らず、クズレを直接にめがけてのほり、後は舊道を行つたものらしい。即ち一つはあくまで溪沿ひに、一つは途中より見通しのきく尾根とその中腹沿ひである。いづれにしても昔から釧路面は阿

寒への正道の如くに思はれる。北見口はほんの踏趾にすぎなかつた。

次に造材小屋の時代である。明治三十七年頃より四十年前後迄、オクルシベ川の温泉湧出地附近に事務所があり、二三百名の人夫が、伐木に従事してゐた。この時代麓からオクルシベ附近まで、五万の點線の逕はよくふまれてゐたがそれから先、湖畔道は、ブッシユで、踏趾よりなく、夏日はかなりの困難を伴つたと言はれてゐる。更に明治三十八年の頃、城河氏が湖畔造材に入るに及び、湖畔一步園内の伐採に従事し、四十年の頃、七曲り道踏を開拓した。北見道路のかりわけは、明治四十五年の頃で、シリコマベツに造材の④が物貨運搬のため、なしたものである。(以上は主にルシベ驛遞主人、湖畔工藤氏、シリコマベツ關氏等に依つてゐる。)

さて近時山岳會と道廳に待つて、阿寒の道は、大正十二年來大改造をされ、現在私達が通つた時すら改修中のものがあつた。今阿寒湖への道を左に記さう。

1. 釧路道

釧路—野澤驛遞

i 釧路—舌辛—飽別野澤驛遞

ii 釧路—雄別炭山—飽別野澤驛遞

飽別—ピリカネツブ

ピリカネツブ—湖畔

i ピリカネツブ—大澤まはり新道

ii ピリカネツブ—七曲り舊道

iii ピリカネツブ—雌阿寒岳—湖畔

2. 北見道

津別—相生—湖畔

3. 屈斜路道

i 屈斜路—バンケトウ—イベシベツ—湖畔

ii 屈斜路—バンケトウ—ペンケトウ—湖畔

4. 足寄道

足寄—雌阿寒温泉—雌阿寒岳—湖畔

右の中、釧路道と北見道は自働車道路と言つても好い。釧路道の中、新道はピリカネツブ上部半里弱の所で舊道に別れ、阿寒川沿ひに、舊道と平行し、湖畔半里強の所で相會する。雄別野澤間は現在では判りよいこはいへないけれど、開墾小屋があるから聞き聞き行けば道損はしまし。荷の多い人(トロ使用)並びに遞馬を用ひたい人は舌辛より行くべきである。北見面への湖畔沿ひの路について言へば、點

線逕を通るものはなく、新道は、湖畔四百三十二米の三角
點からもつこ湖岸寄りに、シリコマベツ部落までつゞいて
ゐる。屈斜路にぬけるには、雄阿寒の南側東側をめぐる山
岳會道路によるよりも、イベシベツまで舟行し、林内歩道
をとつて、バンケ湖畔で、山岳會道路に會し、峠越えをし
た方が好いと言はれてゐる。しかしバンケトウによれぬ恨
はある。足寄のみちも、山頂から雌阿寒温泉まではかなり
に踏むであるし、後は馬も通ふと言ふから大したことはあ
るまい。殖民道路に出るまで、温泉から一里半は、大變に
森林が好いと聞いてゐる。

雌阿寒登山道では、もと湖畔より一里弱の所ならびにそれ
より湖畔寄りの所と二ヶ所で、ウグヒ川を渡つたが、新道

路は、ウグヒ川の右岸沿ひに行つてゐる。ピリカネツブ面
に於てはフレベツ川と白水川の合流地點で、白水川を渡る
ことになつてゐるが、今はフレベツ川を渡つて、白水川を
渡らず、左岸沿ひに行くことになつてゐる。

雌阿寒道は指導標によつてゆけば毫も間違ふ地點がないし
逕も頗るよく出てゐる。湖畔から約十町で新道と別れ、
瀧の口に近く阿寒川を渡り、オクルシベ方向に沿ひ、雄阿
寒岳南側、等高線の記號の入つた東の尾根をのほるのであ
る。そして頂上下では千二百五米の峯頭下の鞍部を通つて
それから南よりに三角點に達するのである。雌阿寒に雌阿
寒、バンケにバンケは、阿寒に遊ぶ若い人には是非おすゝめ
したい地點である。

シーシユブルングの超人

トウリン・タムス君

廣 田 生

近世に於ける各種シユボルツの著しく勃興せるものに、
シーシユボルツを擧ぐることを許さるゝならば、吾々は直

ちにラングラウフと、そしてシーシユブルングを指折るで
あらう。

又そのシーシユボルトの王國の名を問はるゝならば直ちにノールウエーをあぐるであらう。そしてその王國に於ける二人の壯者の名を指して世界のシーシユボルトの最大權威者となすであらう。その世界シーシユボルト界の二超人、それは已に數年前より吾等の親しみを持つ Theodor Haug 君こそしてもう一人は今私が紹介せんとする Emil Thams 君である。

前者はラングラウフを得意とし、後者はシーシユブルングに天稟の才を有するものである。

二超人は已に周知の如く一九二四年度國際スキー選手權大會に於て拔群の成績をあげ、世界ウイソテルシユボルト界の視潮を完全にアプゾルベンせるものである。

世界のシーシユボルトがラングラウフとシーシユブルングとの二つのボールに例ふことが出来るならば正に此二超人はその二つのボールに立つエレクトロデーである。

而して私の今紹介せんとする Thams 君も、亦多くの日本のシーロイフェルによつて知らるゝところである。特に彼のシユブルングスタイルに於て、嘗て彼の寫眞を見たことのある人は決して忘れぬであらふ。

二〇年前のカルセンのシユブルングスタイルを以て第

一時的の特徴とするならば、數年來否現今のタムス君のシユブルングスタイル、それは超近代に於けるシユブルングスタイルの二時の特徴と云へ得やう。

シヤンツエを離れて強く大きく打振る二回の兩腕廻轉動作、續いてはけしく上体を前屈し、くの字以上の体姿勢、兩手先はスキーシユビツツエに觸るゝかと思はるゝまでに突き出され、更にその姿勢を保ちつゝ飛暢して行く有様は實に大鳳の翼を休むるに似たりと云ふべきか。實はその飛躍振りの寫眞をと考へはしたが、むしろそれよりも素顔を充分よく出した寫眞を選んで本誌に紹介した。

最後にタムス君のレコルドを採録すれば

1922 27/2	於キルメンコーレン	K. II.	46m
1923 26/2	同	K. I.	24m
1924 25/2	同	K. I.	41m
1925 4/2	於ツヤムニ		49m



チューリン・タムス

山岳登行に際しての自然の人体に 作用する偉力 (1)

— 一九二四エヴェレスト登行の記事を読んで —

本 田 治 吉

エヴェレスト遠征に關する記事及報告を手にする事は、我々には非常な興味と、研究心をそよるものであつた。そして此の登行の結果、齎られる所のは、此の方面に興味を有する者にとつて、如何に材料を與へるか知れぬのである。

丁度一九二四年の遠征の報告を見て、自分は、自分等が考へて居た事、或は想像し豫期して居た事と可なり異つた事を教へられた。そして自分は如何に自然の力の偉大なるかを今更ながら驚知したのである。自然の有する力の、我々人間の力では測り知る事の出来ないものがある様に思はれるのであつた。

無經驗な自分が、之の尊い体験による記事を読んで之に就て、云々する事の如何に無謀なるかを知らないのではなかつた。それで初めは只正直に譯して載せるつもりであつた。然し只そのまゝ記事を譯報するよりも、多少研究的態度で讀んで行くのも、意味ある事だと思はれたので、自分の無經驗、無智をも省みずに研究して見る氣になつたのである。(故に、自分の研究出来る方面だけを書く事にした。) 従つて暴評、暴言も少くないと思はれる。之の原著者に對しても、之の遠征に尊い体験を致された諸氏に對しても亦之の方面に經驗と智識を持たるゝ方に對しても、自分の無經驗な身を考へずに、暴言、暴評を試みた事の禮を失し

て居る事を感じずには居られぬ。謹で謝す次第である。

(一) 呼吸器系に於ける變化

(Veränderung d. Respirations System.)

誰しも登山に際して先づ經驗する事は、俗に云ふ「息切れ」であらう。即ち呼吸困難—呼吸促進がそれである。

エヴェレスト登山に於ても、之の呼吸困難が最も痛切に感じられたらしい。

漸次登山(飛行機の如き急激登山による變化に對し)による呼吸促進の度を、その高度と比較して見ると1000feet以下では之を見ず、1400f. 以上になると明に見られ、而して1900f. 以上になると、それは一寸した仕事、例へば靴の紐を結ぶとか、辨當を開けるとか、シューラフザック中に入るとか、と云つた様な運動に際しても、直ちに呼吸促進を來し、非常な呼吸困難を見るに云ふ事を知るのである。然し之の呼吸困難の事實も、單に高度のみに左右さるゝものではなく、其の高度に於ける体の運動にも大きな關係を有して居るらしい。それは報告にもある様に、若し体を休めて居るならば、如何に高所に居つても、平地に於けると其の氣分に於ては大差なく、其の呼吸率も平常と異ならず非常に愉快に居れると云ふ經驗が裏付けて居ると思ふ。

兎に角、登山と云ふ運動と、それに伴ふ高度の上昇との二つのファンクシオンに比例して、或はそれ以上に、呼吸困難の率は急増して行くらしい。呼吸は深くなるよりは急激になる。而て之の回復は、只々身体の休息による他ない事は、此等の實驗が證明して居る。

ノルトン氏は、氏が一行より一寸後れて、之に追ひ付く爲め足を早めるには、長き深呼吸を數回繰返さねばならなかつた程であつたと云ふ。彼によると、一時間の最大進行僅か6feetでしかなかつたと云ふ。

ゴムタルベル氏の記録では、2700f. の高地に於ては、一歩前進するに七八回から一〇回の呼吸を要するとあり、尙非常に緩慢な進行でさへ、一分毎か或は二〇—三〇碼毎に一回—二回休んでから次の行動の準備をせねばならないとある。

斯くして呼吸促進が甚しくなり、呼吸のリズムに變化を見る様になると、遂に所謂シャインストック呼吸型(Cheyne Stokes Annung) となると云ふ。之のシャインストック型は、臨床醫學から云ふと、重態で、特に臨終前に多く見られる型で、とにかく良い病狀ではないものである。

のみならず、中には全く病的で、一人は1500f. で熱を

發し、或は咽頭加答兒、嘶嘎（或は全く聲を失ひ）を見、人夫の中には氣管枝炎や咽頭の潰瘍、或は執拗な吐血をへ見たものがあり、最も多いのは咳嗽であつたと云ふ。

ヒングストン氏の之の登行に於て實驗せる高度と呼吸數の關係、及び高度と呼吸力との關係を見るに、丁度兩者は反對の結果を見せて居る。即ち前者は高度に反比例して減少し、後者は高度に比例して増加して來て居る。前者は表

による——第一縱列——水平面に於ては呼吸數の66%。でそ

れが21000ftでは14%e. になつて居る。後者は表によると

——第一縱列——水平面では110m.m.Hgを示して居るのが、21000ftになると150m.m.Hgと云ふ風に、反對に増加して來て居る。（之の方法はガラス管に息を吹込ませ、水銀柱の上昇度盛を讀む方法である。）

I Time breaths held (in sec)

Altitude in Feet	R.W.H	E.O.S.	B. B.	G. B.	E.F.N.	G.L.M.	J.V.H.	A.C.I.	T.H.S.	N.E.O.
Sea-level	64	—	120	—	—	—	90	120	—	—
7,000	40	40	60	40	40	50	42	80	60	55
14,300	39	32	35	32	37	40	—	47	48	—
16,500	20	23	35	20	31	—	23	30	41	28
21,000	14	17	—	20	—	—	17	—	—	—

II Expiratory force in m.m. of Hg

Altitude in feet	R.W.H	E.O.S.	B. B.	G. B.	E.F.N.	G.L.M.	J.V.H.	A.C.I.	T.H.S.	N.E.O.
Sea-level	110	—	—	—	—	—	—	—	—	—

7,000	110	120	140	160	110	110	130	160	120	110
14,300	110	90	160	190	120	120	—	160	120	—
16,500	140	130	210	200	170	—	120	170	120	100
21,000	150	120	—	210	—	—	150	—	—	—

斯ふした登行による呼吸困難は、如何なる原因によつて来るものか？

ドクトル、ケラス氏は、之の原因を風速に歸して『高速度の風の中に於ては殆ど呼吸出来ぬ事から、從て風は肺臓の中へ空氣をつめ込む力が強く、同時に呼吸を排掃し、斯ふして次回に行わるゝ呼吸を妨げるものである』と説明して居る。

ヒングストン氏は、氏等の實驗から之にあまり賛成せず却つて風の輕重と冷氣、乾燥に歸して居る様である。そして氏は斯ふ云つて居る。『エヴェレストは、非常に風の重い事で知られて居る。それは可なり呼吸を妨げる。勿論疾風の時は、呼吸出来ぬ位であるけれど、程良い風速の時は却つて氣持が良い』と

然し其の他に一般的ベルグクランクハイト（高山病）の原因とされて居るのは、第一酸素の不足、第二心身の過勞

（不斷の緊張）である。非常に高所に登らうとする時、而もそれがロッククライミング等になると、心身の不斷の緊張は言語に絶する。而して過度の勞働は免れない。殊に天候の暴れる時はひどい。斯くして内部よりは必要以上に、エネルギーの供給を要求する。然るに高度の上昇と共に酸素は欠乏を告げて来る。遂に心身の要求するエネルギーと、身体之を補給するエネルギーの要求に沿ふ事が出来ぬ爲めに來る現象が大きな原因を爲して居るのではあるまいか殊に風速、冷氣等が伴つてカタル等起して居る者は、氣道の衰弱から、一時的急性の肺氣腫、氣管枝擴張等を伴つて、肺内の毛細血管等の損傷を來して、尙之の呼吸困難の現象を大きくするものではあるまいかと、自分は思ふのである。

(二)血液循環系に於ける變化 (Circulatory System)
登行に於て、呼吸困難に次で胸迫感とか、心悸亢進に惱

まされて来るのは當然の事であらう。

之も 19000^f を境として、急激に變化して来るらしい。

其の病狀として擧げられるものは、誰しも氣づく事としては、顔面及口唇の蒼白、手足の（先端部に特に著し）蒼斑四肢の冷却等である。

エヴェレストに於ける實例にても、メンバーの中三人は眩暈を訴へ、而も一人は深呼吸で直ぐ治つたと云ふ。

斯かる病狀の高山に於て特に平地と異なるのは、一度四肢が冷却するに、之を回復するに、たとへシユラーフザツクの中に入つても、中々暖かくならず、非常に困難を感じるのと云ふ事である。

脈搏は、呼吸と同じく休息時は、平常と變化ない。然し少しでも運動すると、それが一寸した運動でも、脈搏は直ちに急激に變化して来る。矢張り普通は、脈搏数が急増するのである。

ノルトン氏の常脈は、一分間 60 と云ふ（普通成人としては少い）之が 27000^f で休息時は 60 而して之が 14000^f の峠を越した時一分間に四つばかりの不整脈を見たと云ふ。

然し之は必ずしも病的變化を見る必要もあるまいと思ふ。

モツソー氏の報告によると、モントローザ (Montrose)

で氏のメンバーの凡てが、心臓のある不整型を見たと言つて居る。

高所に於ける出血、例は齒齦からの出血、口唇出血、結膜出血、又は鼻血等は衆知の事であらう。然し斯ふした事實は、今度のエヴェレスト登行には見なかつた云ふ。

次の表は、今度のエヴェレストに於て實驗された成績だと云ふが、それに依ると高度と脈搏の關係が良くわかる。

第一列は休息時の脈搏で、21000^f での變化を除ては全く平常と變りない。第二列は立上る時の運動による脈搏の變化の、高度によつて増加する状を示し、第三列は規則正しい運動、（床から椅子の上につたり降りたりする運動を一分間五回速度で行へるもの）による脈搏の變化である。之の數は非常な増加を示して居る。第四列は之の脈搏變化が平常數に歸るまでの時間である。矢張りその脈數と高度に左右されて居る。

III Pulse-rate of one individual

尙血液中の變化を見ると、一番問題になる可きは、この血 (Force) で採用せる方法で Sphygmo-manometer で計したも
 壓は高度には左程左右されないらしい。(この Royal air ののであると云ふ) 次の表がそれである。

IV Blood-pressure to Successive altitudes.

Altitude in feet	Pulse-rate Perminute Sitting		Pulse-rate Perminute Standing		Pulse-rate Perminute after regulated exercise.		Time in secs. of return of pulse to normal.
	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	
Sea-level	72	—	72	—	84	—	20
7,000	72	—	84	—	96	—	15
14,300	72	—	84	—	108	—	40
16,500	72	—	96	—	120	—	20
21,000	108	—	120	—	144	—	20

Altitude in feet	R. W. H.		E. O. S.		B. B.		G. B.		E. F. N.		J. V. H.		G. L. M.		A. C. I.		T. H. S.		N. E. O.	
	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.	Sys.	Dias.
Sea-level	120	80	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7,000	130	90	125	90	150	110	130	90	140	80	120	100	120	85	130	100	110	85	100	80
14,300	135	95	115	80	145	85	130	90	135	90	—	—	120	90	130	100	130	90	—	—
16,500	146	104	128	90	140	120	128	93	136	96	126	94	122	78	140	110	120	82	125	95
21,000	138	118	100	80	—	—	110	90	—	—	100	80	—	—	—	—	—	—	—	—

然るに血液中の血球数の變化は非常なものである。(エ
 ヴェレストでは、斯ふしたデリケートな試験を爲すに、あ
 まりに周圍のコンディションが激しすぎて、正しい數は
 求められなかつたと云つて居るが) 然しバミールプラット
 (Pamir Plateau) での實驗によると、次の表の如き數が見
 られる。

V

Date	Altitude(feet)	R.B.K. per mm.
April 10	700	4,480,000
May 12	4,390	5,240,000
May 21	8,000	6,040,000
May 28	10,000	6,624,000
May 30	11,960	6,760,000
June 1	12,400	6,800,000
June 21	13,300	7,525,000
June 23	15,600	7,840,000
June 26	16,900	7,640,000
July 27	18,200	8,320,000

表 166

700F では赤血球數 4,480,000 R.B.K.
 18,200F では赤血球數 8,320,000 R.B.K.

とある様に、非常な激増を示して居る。尙注意すべき事は
 中央アジア (Central Asian Plateau) に住む人々は、平地で
 ももつと高い數を有して居るまい。

Sarikali	7,596,000
Kinghiz	7,920,000
European	5,000,000

斯ふした現象も矢張、呼吸系に於ける變化に伴ふ第二次
 的變化、及び心身過勞に伴ふ發汗、水分の不足による血液
 プラズマの血管壁への侵出による爲めではあるまいかと、
 自分には考へられるのである。(山スキ第五〇號三〇
 一三二頁参照)

(三) 筋力の變化 (Muskel Kraft)

ヒングストーン氏は、飛行士等の空中飛行中非常な筋肉衰
 弱を引越す事に比較して、それ程大した筋力の衰弱は起ら
 ぬと云つて居るが、然し相當注意に値する丈の筋力の減
 退は認められる様に思ふ。而て氏はそれを飛行機に反し漸
 次登行に歸因して居る。

Royal Air Force で試験された結果を見ると、延髄中心の
 安定度と、個人的の疲勞に對する抵抗のキャパシティーがわ
 かると思ふ(水銀柱に息を 40mm. Hg. まで吹き込み、その

度盛を支持し得る時間を計つたもの。尙之と同時に計られた之のアルバイトを爲す間の脈搏の變化を見ると面白い結果が見られるのである。前者に於ては、第一縦列で、水平面にては45Sec.も持ちつとけて居り乍ら21000ft.になると僅か15Sec.しか持続せぬ云ふ。後者に於ては、アルバイトの續くに從つて、脈搏も多くなつて居るが、或程度迄行くくと却つて、下つて来る、第二例の最後6/9.9.9.9に於て

殊に明である。之は心臟機能の或程度以上、アルバイトのコンベンザチオンがつよかなくなる事を語るものではあるまいか？(第一例の第一項の6/7.8.9.9.8.7.に就て云へばストックで限られて居る前の6は試験前の脈搏55Sec.の平均數は試験開始後第一回目55Sec.中の脈搏平均數、以下順次之に従ふ。)

Endurance Test.

VI Time in secs. Hg. Maintained at 40mm.

Altitude in feet	R.W.H.	E.O.S.	B. B.	G. B.	E.F.N.	G.L.M.	J.V.H.	A.C.I.	F.H.S.	N.E.O.
Sea-level	45	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7,000	35	30	60	50	20	60	35	45	50	50
14,300	30	30	25	40	25	35	—	45	25	—
16,500	23	23	23	15	23	—	17	25	22	20
21,000	15	15	—	15	—	—	10	—	—	—

VII Pulse rate in secs. during Endurance test

Altitude in feet	E. O. S.	B. B.	G. B.	A. C. I.
Sea-level	—	—	—	—
7,000	—	—	—	—
14,300	—	—	—	—
16,500	—	—	—	—
21,000	—	—	—	—

7.000	6/7.8.9.8.7.	6/6.7.9.9.9.7.6.6.6.5	5/6.6.8.6.5.4.5.5.5.	8/9.11.8.7.6.6.6.6
14.300	6/6.7.7.7.7.7.	6/7.8.8.6.5.	5/7.7.7.6.8.6.5.5.	8/9.9.11.10.9.9.9.9.8.
16.500	6/7.7.8.7.	6/9.9.9.3.	6/7.8.9.	8/11.10.9.7.6.
21.000	8/10.8.6.	—	9/10.10.6.	—

然し斯く高所に於ても、尙体力のつゞく事は驚かざるを得ない。殊に氏は動物等が、尙高所で自由自在に活動して居るのを見て、胸を打たれると云つて居る。氏に依れば、Ratens & crow 等は 21000f の所で、氏等のキャンプに遊び來たり、Lammergeyers が 23000f の所で山を廻り歩き、Chaughis がクライマーについて 27000f の最高まで行つた事等を見て驚いたと語つて居る。而て氏は、後述の様に、之を皆 Acclimatisation に協因せしめて居るのである。

(四) 特種感覺機能の變化 (Spezielle Sensibilität)

感覺機能の變化は、アルピニストの間には、實に屢々經驗されるものである。即ち視力、聽力、觸覺、臭覺及味覺等の損傷を見る。然しエヴェレスト登行に於ては、之の種の損傷は大したものではなかつたらしい。

メンバーの中二人は觸覺消失を訴へ、一人は觸覺不敏を訴へた。一人は味覺を失つて、ペバメントのスラブ (Slab)

の本當の味がはからなかつたと云ふ。

斯の變化は、主に 19000f 以上の高地に見られたものでそれもベースキャンプに歸着して回復したミ云ふ事である

(五) 痛 感 覺 (Schmerz Kopfschmerz)

登行による高山病の一症狀として、頭痛を訴へるのは普通の事である。

エヴェレストに於ても、少數の人は之にやられて居る事を知る。然し注意に値する事は、之の際の頭痛は、第一頸部に初つて、之が次第に弱い頭痛に移行するミ云ふ事である。

メンバーの中、少數の人はエヴェレストのあの高原に到着した第一日目にすでにやられ、四五日後其の地に慣れると回復したと云ふ。人夫の多くは、チベットに入つた時、頭痛を訴へたと云ふ。此の地の住民でも、斯ふした頭痛に對する免疫はないらしい。彼等は之に對する治療法として、

コマカミに万創膏をはつたり、頬に黒いビグメントの様なものをすり付けたりして居る云ふ。

斯ふした頭痛に對して、氏は何も説明して居らない。然し自分は、之の原因は一つは酸素の不足が與つて居るものではあるまいかと思はれるのである。即ち一つは酸素の欠乏により、腦部の營養不足から一つは前述の呼吸器系の過勞に依つて、其の呼吸系の中樞の根據のある、延髓部が衰弱を來たす爲めに起る現象ではあるまいかと思はれるのである。(然しこれは確かな見地から云ふのではない。斯ふ想像される丈けである。)

(六) 消化器系變化 (Magen Darm System)

よく登山して(たとへ小さな山でも)食慾不振を來して食事が出来なかつたり飯は食へずに水ばかり飲んで居る人を見る。山岳登行に於ても之が非常に大きなフワクターとなると云ふ。消化器系の變化は、色んな形式で現れて來る。食慾不振、食慾嗜好の變化、腹痛、嘔吐、下痢、渴等の様に。勿論個人々々の性癖に非常に關係するものではあるけれど。

エヴェレスト登行に於ても、種々な形に於て見られたと云ふ。ヒングストン氏は、ベースキヤンプに於て一概に嗜

好が變つたと云い。ブルース氏は 12000' まではまだ食慾は變化されなかつた。 9000' で肉に對する嫌惡を感じたけれど、尙穀類や甘物類に對する嗜好は失はれなかつた。 12000' では全く個形物に對する食慾を失はれ、只カフェーや軽いスूपに對する食慾丈けしか持てなかつたとか云ふ。ゾムメルベルは 12000' ですでに、個形物に對する食慾をなくし、然し流動物や甘物、果實に對する嗜好丈けは有して居たと云ふ。

之によつて見ると 12000' 以上では甘味のものが一番美味で、肉類が一番不味に感ずるらしいと云ふ事は、一般の説である。登山に經驗のある人が、期せずして甘味のものを用意するのも斯ふした事に基因するのではあるまいか。嘔吐、惡心等の症狀はエヴェレスト登行では見なかつたと云ふ。下痢は稀とは云へなかつたらしい。中には執拗であつて、平地に歸るまで回復せなかつたものもある云ふ。

ヒングストン氏は、之の下痢を膽汁の過多に歸因せしめて居る。然し之の他に消化道の過勞、振動衰弱を考へる必要がある様に自分には思へるのである。

之等の變化の中、最も大きなフワクターは渴であらう殊に奮闘の甚しかつた日には著しい云ふ。

吾々は、高山に於ては特に、水を得る事の非常に困難な事も大きな原因の一つであるが、又之は單に呼吸の結果ではなく、冷氣乾氣の呼吸によつて、氣道の濕氣が消失する爲めに起る現象である。爲めに、目的を途中で放棄して歸らねばならぬ事も多いと云ふ。

身体の乾燥があると、その結果尿量が減少し、先に云つた様に、血液にも大きな變化を引起して來る。

エヴレストでのクライマーの一人は、21000ftで一六一—八時間も小便せなかつた云ひ、他の一人は 28000ft から歸るに、二四時間も小便せなかつたと云ふ事である。

(未完)

彙報抄錄

一九二八年の冬季オリンピック大會はスイスで行はれることとなつてブラーグに於けるオリンピック會議によつて其のプログラムを公に發表した。

- 一、長距離競走 (五〇軒)
- 一、ジャンプ

一、軍隊斥候競走

一、アイスホッケー

一、ファイギュアースケートチング

一、スケート競走

一、ボツプスレイ

一、トボガーン

他の冬季スポーツはオープン競技としては考へられてゐるが本式の競技としては認められてはゐないのである。

此の四年毎の冬季オリンピック大會は唯だ其の土地だけで行はれるものとは限られてゐずして夏季のオリンピック大會と同様に他の土地に於ても行はれ得るものである。

— デル・ウインテルより —

H. U. S. V. 新著圖書

Ski Unterhaltungen

Carl. J. Luther

Winterlob

Hans Rocchi

(以上松方三郎氏寄贈)

Der Winter.

Heft 14 · 1925.

アバンチユール

○ 熱い心情を抱いて、冒険を尋ね且それに生きんとして戸外に引き出される者に冬は常に新鮮な常に變幻極りのないそれらアバンチユール冒険を提供するであらう。

更にそれは吾々の生活に於ける境界石であり吾々の想出消し難き刻印である。何故となればそれは吾々の若き時代の止み難き望みと恐らくは光輝ある充實であつたと、思はれる一部份である故——

クルト・ドリイ

○ 次に云ふのは又山にからまる冒険の挿話。

Mさんと連立つて圓山に散歩に出かけたグプラーさんがあの冬はスキート場になるスロープに近く一つの小さい植物を見つけた。急に目を輝かしてそれを取り上げてはその白い綿毛が總々生えてる葉を莖をみつめて居たが顧みてこれはエーデル・ワイスでないかと尋ねた相である。残念ながら似てこそ居たればそれはアルプスに咲くエーデル・ワイスではなかつた。その時グプラーさんの悲しげな顔落膽した様な顔は傍に居ても何かしら心を打たれるものがあつたと云ふ。

後になつて解つた事だがこの山好きなグプラーさんはその時遠

く且深い思ひ出に胸が狭められる思ひがしたのであらう。

彼は故郷のチロルに同じく山好きな妻の母に當たる人と兄に當たる人を持つて居た。その年老いた母は山の血を享けたと云つてよい程山を愛した。山に行かなければ身体が變にむづ／＼して病氣の様になると云ふ。チロル附近の急峻な崖は彼女の最も好んだ散歩道であつたのであらう。

ある日の午後、その母と兄は常の日の如くとある崖の上にあつた。ふと見れば崖の遙かに今を咲き誇るエーデル・ワイスの可憐な花が亂れて居た。矢も楯もたまたらず兄は崖を這ひ下り始めた。一時間、二時間、たそがれて行くのにその下つて行つた人の姿は現れて來ない。ロープも何等の用をなさなかつた。夕暮籠の村の人が急を告げられて遠い路をその崖下に辿りついた時は、その人は手も足も散々に痛められて微かな息で横はつて居たのである。

幸ひに生命はとりとめる事が出来たけれど、その人は發作的の強い頭痛と狂はしい苦痛を持たなければならなかつた。その人が今在りやなしやは聞き洩らした。それからまたこゝには、その年老いて尙も叟錯たるその老婦人が大戦中、物質の窮乏の際にリュックサックをせおつて遠くの山間にバタ、チーズを買出しに行き行きした等の話は省なければならぬ。たゞ終りにエーデル・ワイスが千島列島にある事を聞いたグプラーさんは是非そこへ行つて見たいと云はれて居るとの事。

their one-sided interest in the *Lang-* and *Sprunglauf*."

Dr. Tauern then proceeds to advocate a downhill race in which ski-runners shall be forbidden to use their sticks as a brake.

The course should be so defined by flags as to test the competitors' power of making turns. In other words, he suggests a course which is a combination of a Straight Race and a Slalom Race. We should be interested to learn his views on our racing rules which award the championship on two races, the first a Straight Race and the second a Slalom Race.

Dr. Tauern's article appeared in *Der Winter*, Jahrgang xviii., Heft No. 9. The whole article deserves careful study.

The revolt against the *Langlauf* found expression last winter in some of the leading Swiss journals. "A.Z." in *Sport* pointed out that the *Langlauf* was admirably suited to the hilly country around Christiania, but that it was absurd for the Swiss to copy blindly a form of race which had no analogy with Swiss conditions. The writer repeats the usual arguments against the *Langlauf* which have been already summarised above, and concludes with the exhortation, "Fahren' wir in unseren Bergen Ski und lassen wir die anderen 'laufen.'"

I do not, however, think much of "A.Z.'s" suggestion for a compromise between the two schools. A race which contained one-seventh of level, two-sevenths of uphill and four-sevenths of downhill ski-ing would be a gift to the *Langläufer*. A good runner will run downhill twenty times as fast as he can climb, and the correct proportions should be nineteen-twentieths downhill and one-twentieth uphill, and even so you would be giving an *equal* advantage to mere strength as opposed to technique. Even a couple of hundred feet uphill in a downhill race of 3,000 feet is sufficient to upset the balance between technique and strength.

Finally, *Ski Korrespondenzblatt*, the official monthly publication of the Swiss Ski Association, opened its issue for March 27th with a long article attacking the *Langlauf*. Herr Werner Salvisberg puts the case against the *Langlauf* with great force, and suggests that the Swiss Championship should be awarded on a downhill race and a jump. He is in favour of disqualification for stick-riding and would like to see the Slalom reintroduced.

So much for the literary campaign against the *Langlauf*. But the revolt has not been merely one of words. The Swiss University Ski Club held their first championship under rules very similar to those which govern the British Ski Championship. This event is described elsewhere in this issue. We hope that the example of the Swiss University men will be followed, and the Continental Ski Championships will escape from the fetish of the *Langlauf*, and will, at least, even if they retain the *Langlauf*, include a downhill race and a Slalom in their fixture lists.

ness of the race, the uphill climb. Indeed, in the Olympic Games at Chamonix the stick was freely used on the descent by almost all the competitors, and certainly by the winning Norwegian competitors.

Herr Fanck, in his book, reviewed on page 7 of this issue complains bitterly that "important downhill races are being held at ever-lengthening intervals, and even where they are held, it is unfortunately the case that stick-riding is not penalised, with the result that these races do not provide a real test of the technique of downhill running. If, in addition to jumping and long-distance competitions, the downhill race was recognised as the third and equally important branch of ski-ing, and if, as should obviously be the case, stick-riding were absolutely forbidden, we should have obtained convincing proof of the best style for downhill running."

Herr Fanck does not seem to know that our Championship has been held on the very lines he suggests for some years past.

Herr O. D. Tauern contributes to that excellent paper *Der Winter* an admirable article in which he protests against the *Langlauf*. The article is too long to quote in full, but some of the more significant passages deserve to be translated.

"The highest achievement in ski-ing is the complete mastery of the ski. The *Langlauf* makes very little demand on technical ability, but enormous demands on the runner's endurance and bodily strength, on his heart and on his lungs. Jumping calls for specialised qualities, and the number of those who can devote themselves to jumping is small. . . . Many jumpers cannot compete in the *Langlauf*, and an ever-growing number of ski-runners cannot compete either in *Langlauf* or in *Sprunglauf*. Why should these not be given an opportunity for proving their skill in competitions? . . ."

Why not, indeed. That is the point which the defenders of the *Langlauf* consistently ignore. They may or may not be right in insisting that the *Langlauf* should be retained as one event at all international meetings. But they have no case for ignoring the claims of men who are expert downhill runners but detest the *Langlauf*. Why should the normal ski-runner—for to ski downhill is normal and to race uphill is abnormal—be denied his chance of measuring himself against his fellows. Nobody has ever answered this question. Nobody will ever answer this question. "It is possible to-day," Dr. Tauern continues, "for a man to become ski champion who shows up very badly in a long downhill run against companions who have mastered the technique of downhill running. . . . We need only consider the Norwegians, who have devoted themselves for decades to the *Langlauf* and *Sprunglauf*. And yet almost every good Norwegian runner who came to us, showed up badly against our best runners in the descent of Alpine country. It is only partially true that the Norwegian ski-ing country is not suitable for *Geländelauf*. This only applies to the neighbourhood of Oslo. The comparative weakness of Norwegian runners in *Geländelauf* is due to

Swiss Ski Championship the course for the long-distance race was 15 kilometres long, and involved about 1,000 feet of downhill running. The winner's time was an hour. Expert ski-runners seldom take longer than two or three minutes to run down a thousand feet. In other words, in the Swiss Ski Championship the winner probably spends twenty times as long racing along the level or uphill as he does running down hill. The difference between the best downhill runner in the world and the average first-class runner would not work out at more than about a minute or a minute and a half in a thousand-foot descent. In the course of an hour's race a little extra training would easily mean a difference of two or three minutes at the very least on the level and uphill portions, and might easily mean a difference of ten minutes. The best downhill runner in the world would therefore stand no chance against a man whose legs, muscles, and lungs were better developed.

Of course it is necessary to climb in order to run downhill. But racing up a mountain is anathema to mountaineers, and a ski-runner when he is climbing is primarily a mountaineer. No good cross country ski-ing party races wildly uphill.

In order to ski downhill it is necessary to climb. In order to row it is necessary to carry your boat down to the water. But boat races only begin when the boat has reached the water. If the Oxford and Cambridge crews had to carry their boats for ten miles before embarking at Putney, and if the boat race was decided on the aggregate time of the race to the water's edge and the race on the water, the actual oarsmanship displayed between Putney and Mortlake would count for very little. The parallel with long-distance racing is obvious.

The fact that all we understand by ski-ing—in other words, the glory of a swift descent at high speed—is practically ruled out of court in a long-distance race is proved by the Norwegian racing regulations, which give detailed instructions on the best method of training for distance races, and on the best methods of setting the course for such races. Three pages are devoted to training, and almost every line is concerned with the art of getting uphill and along the level. Downhill ski-ing merely gets a passing reference: "When going downhill one should regain breath and rest as much as possible. Avoid falling, as it both fatigues and lowers the spirit." Instructions for planning out the track contain a significant sentence: "After long and difficult ascents, an easy descent should, if possible, be planned, so that the runners may obtain rest."

The obvious deduction from these hints is that the wise ski-runner will ride easily downhill on his sticks, saving his legs for the real busi-

The Revolt Against the Long-Distance Race.

By ARNOLD LUNN.

In 1921, when the Federal Council decided to depart from Continental precedent and to exclude long-distance racing from the British Ski Championship, we were told that we were making ourselves ridiculous by our refusal slavishly to copy the traditional form of racing favoured by the greatest masters of the art. But a man need not necessarily be a champion in order to form an opinion on general principles or to realise that one form of racing is better than another form. The intense conservatism of mankind is often responsible for the maintenance of traditions both bad and good, and the adoption of the Norwegian system in Europe did not necessarily prove that a form of racing which may be suited to the country around Christiania is the best possible form for other lands.

There are really to separate issues involved. The first is whether a downhill race should be substituted for the long-distance race in international fixtures, and the second whether there is any case for ignoring the downhill race altogether.

There may be some reason for maintaining the long-distance race. There is no reason whatsoever for refusing to recognise in international championships a form of racing which is admitted by everybody to be a finer test of technique than a long-distance race. Technique and skill should have their reward as well as lungs and muscle.

The objections to the long-distance race may be summed up briefly as follows :—

1.—The *Langlauf* race is severer strain on the heart than any other form of sport. A contributor to a recent issue of this YEAR BOOK has remarked that long-distance racing was no more severe than Rugby football. The result of researches into the affects of sport on the heart which have recently been published in Vienna, and which are reviewed in this issue, contain a signal refutation of this optimistic assertion.

2.—Long-distance racing is the monopoly of those who can afford weeks of practice and training. The long-distance champions therefore tend to be semi-professionals. They have to devote weeks of the year to training. The result is that these long-distance races are often won by sturdy mountain peasants who live among the hills, and who have frequent access to the snow. In other words, the *Dauerlauf* tends to become a *Bauerlauf*, which the town dweller has little chance of winning.

3.—The long-distance race is no test of technique. In the last

スキー並 附屬品

製作 販賣

••(呈カタログ)••



札幌

小谷運動具店

電話一五六八番
振替七九六四番

賜攝政宮殿下御買上光榮
スケーチングシューズ



アルハイイン式
ノールウエー式

最上 金貳拾圓
上等 金拾八圓
中等 金拾五圓
並等 金拾參圓

文數御一報次第御郵送
申上候

〔創業明治拾一年〕

各種製靴販賣

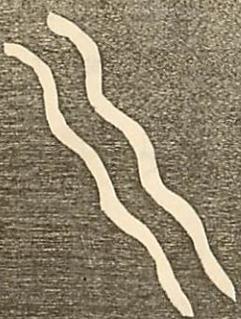
岩井靴店

札幌市南一條西二・電話二百四十四番



一化の工式

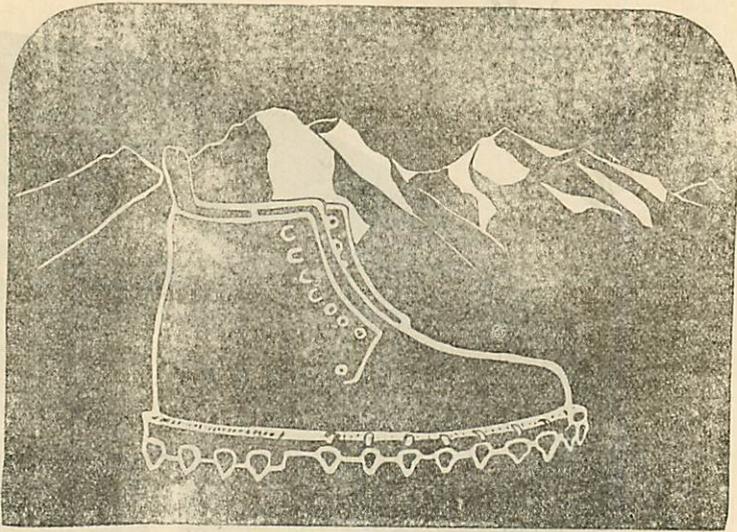
不手一靴



札幌市南一条通三丁目

木本靴店

テ於ニ會覽博藝工産畜回二第
領受牌金賞等一



靴一キスと靴山登

.....

角目丁四區郷本市京東

店靴屋田太

番二一七四川石小話電

番七二一六京東替振

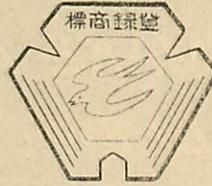
GET SUPERFINE SKEES.
AND MAKE AN
EXCELLENT
RECORD!



優秀ナルスキー用具

小樽

梅屋運動具店



優秀なるレコードは
優秀なるスキーに依る!!

斯界第一
大量製産

ツバメ印スキー

全国有名店に有り

製造元
札幌市

中野商店

スキー部

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことを願ひます又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時には最後の分の包装にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

大正十四年十一月三十日印刷

大正十四年十二月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 相 川 正 義

印刷兼 發行者 廣 田 戸 七 郎

札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

札幌市北六條西六丁目

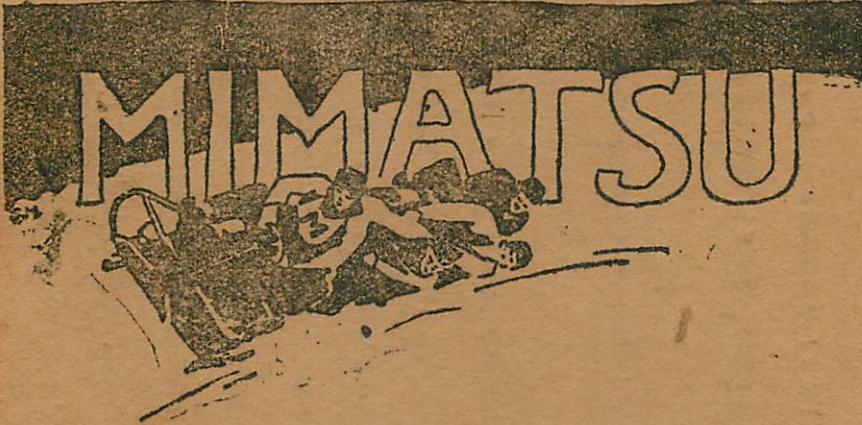
發行所 山とスキーの會

振替口座水欄八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo

No 55. Desembro 1925. Sapporo. Japanujo.

The Leading Winter Sport House,



美滿津特製

慶大山岳部、學習院山岳部、早大スキー部

一高スキー部

帝大山岳、スキー部御用

スキー及びビンディング

ポッフスレー

スレッチとトボーガン

スノーシュウ



冬期登山用具各種

ウキンター・キャンピング用具

フキギユア・ホッキー・スピード

スケート

アイス・ヤツト等

合名會社

美滿津商店

東京・本郷・赤門前

電話(小石川)八四五・二〇七一

大正十四年七月二十三日第三種郵便物認可
大正十四年十一月三十日印刷
大正十四年十二月一日發行

山とスキー

第五十五號

定價參拾錢